

草野心平「方々にゐる」にみえる夢のきしみ

大橋 毅彦

草野心平の小説「方々にゐる」は、戦時下上海の邦字新聞『大陸新報』に、一九四二年三月一日から三月三十一日まで五十四回にわたって連載された。未完に終わったが、筑摩書房版『草野心平全集』第七卷（一九八二・七）にも収録されたこの作品の概要をまず説明しておく。

舞台及び時代背景は、日本軍の中国大陸侵攻の過程で、汪精衛（汪兆銘）を首班として日中和平を目指す動きが顕在化してきた頃の南京（と青島）。「中国側に属してゐる或る復興事業の整備事務所」に勤めている北山十蔵の前に現れた外山梨花と高畑春子。啞と聾のハンディを負いながらも、明朗で純真な性情は傷つけられないでいる梨花、旅先でその計報に接した亡き婁蘭子に共通した美しさを持つ春子、この二人の女性と十蔵との間のロマンスがどう発展していくかを捉えるのが物語の縦糸だ

とすれば、十蔵の下で働く陳芳雪とその兄でいまは重慶にいる元貞、それに芳雪の友人で一家の生計のために南京のダンスホールに勤める白蛾という三人の中国人が、「抗日」と「和平」をめぐるって意見の対立を見、葛藤していくさまを描くのが物語の横糸といえようか。

五十四回目に置かれた「終結のことば」では、本来ならば続けていききたかったこの先のストーリーの展開に関して、「抗日であつた白蛾が泪のいつばい溢れた或る男の眼をみてから、従来のももの考へ方に自壊作用が現れてゆき遂ひには劇しい和平の徒になつてゆく」とか、「梨花はどうなるだらう。／梨花は大東亜戦争勃発の日に死んでいく。／おぼろげにしか見えない新聞の大きな活字をみながら、うれしさうにすすりなき北山の手をにぎつたまゝ死んでゆきます」といったことばが記されて

いる。これを見るかぎり、作品発表時点で、汪精衛を首班とする「南京国民政府」の宣伝部顧問として南京に在住していた心平の制作モチーフが、いわゆる東亜新秩序建設の掛け声に奉仕する類型性を免れるものでなかったことがやはり確認されよう。

小説本文中にあっても、抗戦のデモに参加していた芳雪の和平運動に移ってきた経緯が、「そしていつの間にか、本当にいつの間にか自然に和平の陣営内にあるやうになり」というやうに、思想上の転換のドラマの肝心な部分の描象されるかたちで語られていたり、「(以前より)もつと静かな潜然が(和平運動の渦中にある自身の)からだのなかに燃えあがりつゝある」(一)内の語は引用者による注、以下同)ことが、「それを正しいと芳雪は思った」というやうに無条件に容認されている点、一方の北山十蔵サイドでは、家で飼っている鳩たちを「ホー／ピン／ウー／タン(Ⅱ和／平／運／動)」と名づけてもいれば、青島で再会した友人沢の前で、「南京の心構へ」の健全さについての自説を何の逡巡もなく堂々と展開するくだりに、そうした傾向は明らかに示されている。

「方々にゐる」というタイトルについても言及しておこう。おそらくこのタイトルは、沢との対話にあって十蔵が口にした、「驚いたもんだねえ、(自分たちはいま)青島にゐるんだから

ねえ、(かつて学友だった)野村や坂本は満洲にゐるし広東にはほら柚木がゐる。」(傍点Ⅱ引用者)といった科白にちなんだものではなからうか。そしてそれは、吉田熙生「琥珀の夜明け」草野心平の〈アジア〉(『現代詩物語』一九七八・八 有斐閣)の言葉を借りるならば、「未来を背負ふ君たちが。／六百から六万五千。／六十五万から六千五百万といふやうに。

／同志はどんどん殖えてゆく」(詩「新しい行進」部分)のやうな、「類」の増殖力、いわばその無数性や無限性をもって「亜細亜」の「夜明け」を表現していく詩法ともつながるニュアンスを帯びてもいよう。時あたかも、シンガポールが日本軍の攻撃を受けて陥落(一九四二・一二・一五)、その四日前の『大陸新報』第一千二百二十五号付録には「米英撃滅！太平洋制覇進軍譜」と題して、太平洋と南方の方々に日の丸がはたたく地図がヴィジュアルに掲載されていたのだった。

とはいえ、この小説の中で描かれたものが、単一なイデオロギーや歴史的なコンテクストに還元されて事足りりとなるものではないのも事実。心平には、後に汪精衛を主人公とした長編小説「運命の人」(『読売新聞』夕刊 一九五四・六・八〜十一・十五)があるが、心平の南京時代に彼と交友のあった会田綱雄は、この小説を「力作」として認めながらも、「文学」とし

ては「方々にゐる」の方が格段に優れているむねの発言をおこなっている。

当時の『大陸新報』紙上で「ローランサン」の詩情すら感ずる」と評されたこともある、在滬女性画家で新制作派協会所属の村尾絢子の、ある種の華やきと優情さをもった挿絵が毎回紙面に載ったことも、小説の中に時局離れした要素があることを予測させもするのだが、作中人物北山十蔵の個性を少しばかり追ってみても、その書齋には、二つ三つの母岩のかたまりや古風なランプと蓄音器、あるいは天井に大きな影を広げる鶴の巣とか、もやっとしたものを感ぜさせる薄の穂の大束などがあって、「戦争という現象」についての感懐を抱かせる地球儀の存在を除いては、時代の波音が聞こえにくい特異な空間の住人で彼があることを伝えていよう。

「動物たちの部屋」の司祭とでも呼んでみたい十蔵もいる。先にも指摘したように、「和平運動」なる鳩のネーミングが国策的プロバガンダの一翼を担っていることは否めないけれども、臆に襲われて真っ白な羽を血まみれにした鴛鴦の沙魯里が、必死のあまりに抱き上げようとする彼の手にガツと噛みついたのもものは、死際の繭子を彷彿させるそのゾツとする美しさに突き動かされて懸命な介抱を施しすれば、何を話している

んだか分らないが彼が鳩たちに喋りかけているその表情が可笑しくって、梨花を吹き出させてしまふ十蔵と動物たちとの関わりからは、生きとし生けるものの生がもっている激しさや美しさ、はたまたその偉大さや可憐さに対して、他を慮ることなく温かく鋭敏な心で接していつている人物像が浮かび上がってこないか。

梨花を落ち着かせる部屋のカーテンの色の選択一つにしてから、「放心したやうに花々に見とれてゐる彼女の顔が「紫の雪のやうであつた」という思い出からの啓示を受けて、藍色のそれを他の暖かな色に代えようとする心の傾きにもそのことは見てとれるし、そういえば動め先に出向く途上の十蔵が道傍で眠っている豚をしげしげと見入るといふ、小説冒頭の場面

(図版1)「方々にゐる」連載1回目の折の村尾絢子の挿画(『大陸新報』1942・2・1)

においてクローズアップされてくるのも、「亜細亜大群青」なる言葉がまといつかせている一種のきな臭さよりも、悠々とした開けっ広げの無心さでその身を天然の中に「深く重くズーン」と投げ出していられる生のたたままいに對する讃歌なのだと言つてもいい。再度村尾桐子の挿絵を持ち出せば、ぐっすり眠り込んでいる黒い豚を小山のように中央に置き、周りには野菊の群落、その上には二匹の戯れる蝶を配したそれは、エレガントでありつつもどこか牧歌的で質朴な気品も漂わせていて、そんな小説のテクストが要請してくる読みとそれなりに調和している(図版一)。

しかし、草野心平研究の現在にあって、吉田文憲『津鯨』から眺めた『富士山』(『現代詩読本 草野心平』所収 一九八九・三 思潮社)に見られるように、戦時下の心平のテクストの持つこのようなロマンティズムが現実との緊張感を欠いたものであり、かつまたそのクリティカルな意識を喪失した精神が生み出した場違いの明るさというものが、そうであることよってかえって時代の戦勝気分が要求するものにあまりにも深くマッチしていることを、指摘する声の上がっていることを等閑視するわけにはいかぬ。

吉田が指摘するこのようなあやうさを孕んだ「場違いの明る

さ」というものに深く関わるキャラクターを、小説「方々にある」に求めるとするならば、「啞のうへに髯」でありながら「ケタ外れの朗らかさ」を振り撒く外山梨花像がやはり問題にされるよう。なぜなら、生れついでにそれと後発的に生じてくるものとの差違はあっても、身体的に二重の「不具という重圧」を背負い、さらにはあまりに突然の父との死別という出来事に遭遇しながらも、「梨花の心は重たい鉛、それはさうよ。でも木当はさうでないの。なんか明るいわ。お父さんの死んだことは悲しいけど、それはそれだだつてあたしの悲しみなんて分んないもの、それを言つたつて仕方がないわ。それはさう思ふのです。それとは違ふのよ。うれしいのよ」といったことばを筆談で伝えていく彼女の心持ちが、そこに住む人たちの人生や運命は個々の次元ではかならずしも苛酷な境遇や試練からは脱け出せてはいないで、たとえば死んだと思つた妻が再会した時には、自分が客となつてあがつた淫売窟の女となつていたという、それにもまた二重の不幸という性格があたえられる事態を生起させながらも、「それでゐて、全体はあかるい」と十蔵が思いなしている、南京という街のイメージと結びつくからである。南京到着早々の梨花が次のような詩を作つて十蔵に贈つたのは、このことと関連してきわめて象徴的である。

南京の明るい部屋に

やつてきた梨花

父を埋めた張家口の丘には

雪があつたけれど

こゝにはない

光りあふれる街であります

ツツぬけの朗らかさを持つ梨花と「光りあふれる」と形容された南京の街とが、たがいにその明るさを反映しあっているわけだが、そのことが救国の方途をめぐって白蛾との意思疎通のうまくいきかねている芳雪が感じ取っている、「みんなのゐる位置が全体に寒々として」という現実認識を隠蔽する役目を負ってしまっている事実は否めない。そしてそれは、戦前版の最後にあたる『歷程』二六号（一九四四・三）に発表された心平の詩「南京は五月雪ふる」のことが持つ、「むらさき色に空ははれ。／そのなかを南京は五月雪ふる。／空いちめんを。／柳絮とび。／柳絮みだれ。／ふるふるつもる。（後略）」といったあまりに奇異な麗しさに受け継がれつつ、作品世界の外部においては、いわゆる『明朗〇〇』という宣伝語の形態をとって盛んに喧伝されていたものでもあった。

このように梨花の明朗さには、どのように割引いても、日本の大陸侵略を美化する言説におもねっていく擁がはめこまれていく（そういえば、先に記した「紫の影のおちてゐる四月の雪のやう」という梨花の顔の形容も、いま取り上げた「南京は五月雪ふる」の冒頭二行に変奏されている、といえなくもない）ことを肯いつつも、その一方で彼女の「桜貝色の耳」の美しさから「那須山脈のさくらんばうの汁をながしたやうな朝の雪の山嶺」を想起しもある、十歳の夢のありどころもやはり気にはなるのだ。春子との出会いを振り返る際には「絹糸を流したやうな高い巻雲の天」をまなかに浮かばせ、「しんしんしんしん降りつもる雪」という音楽としての詩とともに死んだ妻の風貌を蘇えらせていくことも合わさって、無限の美しさとはげしさ、こんこんとした沸き上がりと静けさを持つ宇宙の懐に人間存在が抱きとられていく、その生と死とが循環していくことを、十歳は憧憬しているかのようだ。

おそらく吉田の評論は、こうした側面をも知悉した上で前出の心平批判を練り出しているのだろうし、それを是とするかぎりこれから考えようとすることは、あらかじめその結論部分が規定される性格を持ってしまっただろう。が、それでもなお、私は北山十歳というキャラクターを通じて表れる、心平の

夢のありどころを探ってみたい衝動に駆られる。それは、あわよくはそのロマンティズムを時代の中に還流させて現実と対峙させてみたいという期待があるからであり、かりにその不可能性に直面しなければならぬとしたら、その地点においてこそ彼のテクストの持つ無意識のあやうさを、私なりに噛みしめることができると思うからである。

* * *

梨花、兄の岩蔵とその妻弓子、それに友人沢との関わりを通して十蔵が披瀝していくロマンティズムのうち、今回注目したいのは次の三項である。

- ① 南京の夕暮れの光景を荘厳なものとして受容していくところ。
- ② ヘディンの著作を下敷きに、蛙についての一種のファンタジーを紡ぎ出すところ。
- ③ いわゆる「大黄河科学探検隊」出立の夢。

「またしても鳥の大群が遙かの城壁の上を西北に流れてゆくところであった。しかも背景はだいたい色の天である。なんたる大きな絶景だらう」(①)・「十蔵もそれ(Ⅱスウェン・ヘディンの『中央亜細亞探検記』)は読んでゐたがふと蛙たちの先

祖が生れた侏羅紀頃の風景がもうもうと脳裡にたちのぼつてきた。侏羅紀などの風景はそれこそ岩蔵のいふバリバリ音たてる人間風景とはまるでちがった、言はば現世のものぢやないが、(略)満更蛙一匹だつて見様によつてはカセイホテル位には見える」(②)・「黄河のもつてゐるエネルギーたるや大したものだ。そのエネルギーの拠つて生ずるところとその現象を分析し綜合するんだ」(③)——それぞれに関わる叙述や十蔵の言葉を引いてみたが、(絶景)・(侏羅紀)・(エネルギー)といったことばに顕著なように、それらが詩人草野心平が創出する壮大な詩的宇宙と何らかのつながりをもっていることがわかる。

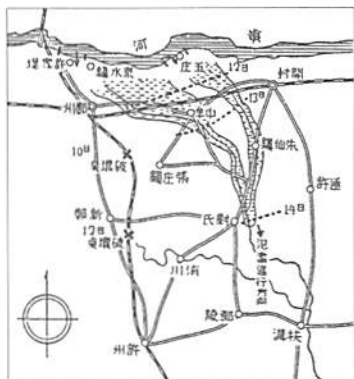
ヘディンの著作に触発された十蔵の心の動きをもう少し追つてみよう。沙漠の中で死にかけてヘディンがようやくやくにしてコータングリアに迎り着き、水たまりの水をガブガブ飲んだ後、次に襲ってきた激しい餓えを凌ごうとそこにいた蛙を食べるくだりを讀んだ時、「なんたる美しい需要供給だらう」「食ふか食はれるかも、そこまで行くとお大壮観だ。生物美談だな」と感じ、「涙が出た」と十蔵は告げるのだが、これとはほとんど同じ感激を伝える言葉を中心の詩の読者である私たちは、やがて詩集『日本沙漠』(一九四七・五 青磁社)に収録された「思ひは猛烈な羊南類のなかに」の中にも発見するだらう。

あるいは同じ詩集に入っている「カリピラ自伝」を想起してもいい。ヘーデンに食われた蛙をカリピラと名づけ、その視点から歌われていったこの作品の中で、「おれ」＝カリピラは自分のことを、渡り鳥とちがって何処へも行けない、「タクラマカン沙漠のはじつば」の「ダリアといふもをかしい」くらいな水だまりという狭小な世界（『はじつば』の語感に注意！）の住人であったと紹介している。しかし、「夏の。／或る美しい日暮れ時。／つかまへられて。痛いと思つたら闇だつた」こと、そうして「まんまと終つた」ことを告げる時、この卑小な生きものは、心平の初期の作品「ヤマカガシの腹の中から仲間告げるゲリゲの言葉」の魅力を説いた大岡信の言を借りれば、食う食われるという闘争原理における犠牲者という発想を越えて、死をより大いなる生命への没入とみなせるような認識が働いている世界に「まんまと」入っていく。「方々にある」に出てくる「見様によつてはカセイホテル位には見える」という比喩も、蛙のこうしたミクロの世界の住人からマクロな世界の住人への質的転換と、一面では関わるものとして受け取れないだらうか。

* * *

黄河探検の夢が十歳の口をついて出る場面では、洪水に現れる黄河のエネルギー、「そのエネルギーの拠つて生ずるところ」とその現象を分析し綜合する」という夢が、〈堤防〉や〈植林〉といった、同時代にあつて進められつゝあつた黄河の治水政策に対して、そうストリートには同化しない性質をもっている点が注目される。

たとえば、この小説が発表された一九四二年に実施された旅行が最後となつた、上海にあつた東亜同文書院大学の学生たちによる中国調査大旅行誌『大陸紀行』（一九四三・四 大陸新報社）には、渡辺卓郎・岡秀彦による「豫州遊歴」という一文が寄せられているが、その中で彼らは、河南省開封の特務機関を訪問して新黄河見学を依頼、堤防破壊を目的とした便衣隊が現れる状況下にあつて、通許縣と大康縣の兩縣内を流れている八〇軒米に及ぶ



(図版2)『中支を征く』(1940・12・28 中支従軍記念写真帖刊行会)掲載の「黄河決潰箇所図解」



(図版3) 『中支を征く』巻末の「中支那全図」の一部。新黄河の流域を確認されたい。また、同書表紙見返し「支那全図」にはまだ「新黄河」が出現していない。その点は(図版3')を参照。



(図版3')

部分の築堤工事が急ピッチで行われている模様を報告している。

ところで、この「新黄河」なるものは、中国軍が徐州占領に勢いを得た日本軍の西進を阻止するため、一九三八年の六月に開封近くの中牟北方で黄河の堤防八箇所を破壊した(図版2)ことによって出現したものであり、黄河の氾濫水が南下して安徽省の正陽関付近にまで達した後、こんどは向きを東に変えて江蘇省に流れ込み、揚子江と並行しながら黄海に河口を開いたもののだが(図版3)、この出来事に取材するとともに、「豫州遊歴」がいうところの堤防の修復工事に励むいわゆる「良民」の立場にその身を移していく中国人を登場させていった長編小説が、奇しくもこれまた「方々にある」と同じ年に再版の出た、宮本幹也の『黄河』(一九四二・九 興亜書局)にはかならない。「支那軍」による三劉砦の堤防の爆破決壊によって、「支那の悲しみ」と呼ばれてきた黄河が氾濫する様子は、作中ではたとえば次のように描かれている。

その音は不思議な音であつた。まるで形容する言葉も無いかのやうな音であつた。

こ——つと言ふ松籟のやうな音もあるかと思へば、草笛のやうなびーつ、びーつと言ふ音もあつた。動物の喚き声のやうな音もあれば、赤子の泣き声のやうな音もあつた。多くの音と音とが混和して、先刻までは沃野であつた河南の平野を掴み取る悪魔の吹奏曲となつてゐるのである。

逃げ口を見つけて雀躍りをして感化院を逃げる不良児のやうに、黄色い水は昨日の取り澄ました行儀の良さを忘れて、猛々しい烈しさで堤防を押し崩し、乗り越えた。そして一散に広茫たる自由の野へと放浪しはじめたのである。

濁流は今、白い泡を吹き、口汚く罵り乍ら、一切のものを水の底へ沈めやうとして果し無く拵がりはじめた。

このやうな描写はたしかに黄河の猛威、その氾濫のエネルギーを伝えてはくる。しかし他の一面では、こうした自然の暴威を引き起こしたいわゆる「荒唐戦術」に対する憤りとでもいったもののフィルター越しに、眼前の光景が捉えられていることを見落とすべきではない。自分の生れ育った「美しい村」四^ウ珂^ウ屯^ウが水底に没したのを謝清徳が目撃した折りの、「吾に返つ

てもう一度見詰めた時には、其処に有るものは水ばかりであつた。水、水、水、黄色く濁つた水が果し無く続いてゐるだけなのであつた」という慨嘆、あるいは水が退いた後の四珂屯の「見えるものはたゞ、乾いた砂地と、泥沼と、石の残つてゐる家らしいものの跡とだけ」といった光景を目の前にして、開封特務機関宜撫班に籍を置く有木の身裡に生じた「異様な感動」といったものなどに、それは示されていよう。そうしてさらに重要なのは、この憤りが次の瞬間には、こうした災厄をもたらしたものに抗する、日本軍の指導下における新たな建設の意志といつたもの（むろんそれは、日本の中国進出を大義名分化する国策のスローガン以外の何物でもなかつたわけだが）に、容易に転化していくことである。

小説の最後には建設戦士になる道を選んだ謝清徳が、「清徳は掛子を脱ぎ棄て、上半身は見事な筋肉の重なり合つてゐる裸であつた。彼は烈しく叱咤し、目まぐるしく動き廻り乍ら、鈍重な数千の苦力を見事に、てあしのやうに動かしてゐた」という姿で立ち現れるのだが、こうした彼の逞しい肉体のイメージは、その生にもともとそなわつたものとして小説の発端部でも紹介されていたと思う。しかもここでは、「濁つてゐる黄河の水と、その流れの無表情な豊かさが、まるで清徳のやうだ」

というように、黄河のもつ滔滔たるエネルギーを肉化した者と
して彼の存在感は示されていた。そんな彼がいまでは、宜撫班
の一人として「鈍重」な苦力を使いこなして献身的に働く姿を
さらす時、無類の雄大さや烈しさを併せ持った黄河のエネル
ギーが、『建業大陸』に向かう政治の力学によって飼い慣らさ
れてしまったという印象が生じてくるのである。ちなみに、先
に紹介した「豫州遊歴」の筆者も、「興亜の聖業は支那人口の
九割を占める農民を流離困難の悲境から救ひ安居楽業の王道生
活を謳歌せしめる観点から黄河問題の一日も早く解決せられん
ことを祈る」という言葉でもって、築堤工事見学記を締めくく
っている。

要するに戦争が長期化する現実下にあつて、黄河に対する幾
多の関心事の中から、河川流域における農作物の生産力を高め、
日本にとつての原料供給地たらしめていこうとする構想に与す
る言説が前景化してきているのだといえよう。さらに言えば、
こうした国策的理念にのつとつた産業振興、資源開発の企図は、
心平詩に登場するあの「ガリビラ」という名前の蛙が暮らして
いた、タクラマカン沙漠の上にも覆い被さっていく。すなわち
「方々にるる」連載中に、「中央亜細亜横断鉄道計画の全貌」
という記事が、『大陸新報』紙上の小説掲載面と同じ第四面に

三日間にわたつて掲載された（一九四二・二・二〇～二二）。

記事が伝えたこの計画の中心人物である湯本昇の構想は、包
頭を起点として「黄河」を溯り、「タクラマカン沙漠」やバミ
ル高原を横切つた後、アフガニスタン、イランを経てイラクの
首府バグダッドに至るもの。で、この構想が狙いとしたのも、
バグダッドで既設鉄道と合してさらにベルリンに至ることから
して分かるように、大國ソ連をはさんでの日独樞軸国間の軍事
産業上での交通路の確保と、当時においては無尽蔵とも喧伝され
ていた中央アジアの地下資源の開発の促進化だったのである。^(付)

* * *

さて、いささか長い寄り道となつたが、ここで再び「方々に
るる」に戻ろう。「洪水が出ると周章てるだらう、そして考へ
ることは堤防と植林だ。（中略）それちや黄河の暴力なんか食
ひとめられないよ。もつとつきとめなきや、つきとめてもどう
しても自然といふやつをどうとも出来ない場合はあるが、（中
略）不可能だといふ結論が出たとするね。それだつてあきらめ
が出たといふことだけでも寝ざめがいいぢやないか」という十
蔵の言葉は、軍事と政治、経済とが一体化し、至上命令にも近

い形で提出されていた黄河問題の解決策の枠から遁走し、あらゆる方を向いているようだ。すなわち、同じ黄河に対する関心とはいっても、そして目下戦争中であるがゆえにその実現は困難ではあるけれども、この大河の「源流」まで溯ることが彼の目指す方向なのだ。混沌としたエネルギーが生れてくるその初発の世界を究めたい、その原初の界域に触れてみたいという心性は、現実的な功利が幅を利かすそれとは異なる次元に属するものであり、むしろそれよりは、次のような詩の一節と通い合うものではなかったか。

海づらには眩しく秋が流れ。

海鳥の二羽が光りと潮をやぶつてとびたては。それにつづいて。

金米糖は空にまかれ。

また林立するキキキの冬。

砲弾雲の炎天や。

Glass — blue.

それが何年も繰り返され。

タスカローラ。

それが億年も繰り返され。

タスカローラ。

タスカローラはくらくタスカローラは見ない。

地球の深い疵口のそのまたズキンと深いタスカローラはだが知っている。

人肉の歴史も。

水雨の脚も。

とほい空のその奥の神の棲家も。

きこえないほど。

そんなに大きく。

無言で叫ぶタスカローラ。

無言で叫ばないタスカローラ。

いまは口をあいたまんま永遠よりもしづかである。

宇宙塵だけが眠つてゐる最も大きな叫びをあげたここがところだ。

詩集『絶景』（一九四〇・九 八雲書林）に載った「タスカローラ」の後半を引いた。八千米もの海の底から「曾て地球で一番大きな叫喚をあげ」たタスカローラが、眩暈のしそうな遠い時間の流れを経てきていま静かに存在していることのうち

に、人間世界の業を超えた大いなる自然の摂理が働いていることを感得しつつ、そういう宇宙的秩序を持った世界の根源に、詩人は一気に駆け上がるとうとしている。ここでもまた、「バリバリ音たてる人間風景とはまるでちがつ」た「蛙たちの先祖が生れた侏羅紀頃の風景」が、十歳の脳裡に「もうもう」と浮かび上がってきたこと、そしてそこで蛙のイメージが、「カセイホテル」という比喩を借りて宇宙大のものとなっていたことを思い出してもいい。十歳の感動や夢の対象としての『黄河』や『蛙』は、本質的にはこのように時代とか社会性を超えていくものなのだ。

* * *

にもかかわらず、そういった属性が明らかに屈曲させられ、時代が期待する観念がその上に接ぎ木されていく様相も、この小説からは見てとれてしまうのだ。すなわち、「蛙たちの先祖が生れた侏羅紀頃の風景」と同じく「遠い時間の果」からやってきたものとして、「石油や鉄や石炭やその他あらゆる埋蔵物資」のことが、前者とセットになって十歳の意識の隅には浮かび上がった点。これらの埋蔵物資が、戦局を有利に導いて

いくために「世界各国が大騒ぎしてゐるものだったことはいうまでもない。ちなみにこの時期の『大陸新報』を繰ってみて、長江一帯での石炭層の発見をもとに、国防産業として重視される石炭液化の「凱歌」が挙げられるに至ったことを報道する記事が見出せる。

さらに、兄岩蔵のぬかみそ談義に耳を傾けた結果、蛙は「東亜共栄圏の問題」とも結びつく。仔細はこうだ。うまい漬物が、ぬかみそを「掻き回すこと只それだけ」によって出来るのと同様に、「東亜共栄圏の問題」も、「途中でうろうろして」るような思惟の複雑さを排した、「単純」で「意志」的な行動をもって解決されるのだという兄の言葉を聞いた十歳は、ホテルに戻ってからのぼんやりした空想の中で「ぬかみそ」と「共栄圏」と「蛙」を甦らせ、「これは満更関係のない事ではない」と思い当たってニヤリと笑うのだ。なぜ「蛙」が他の二つと親和的な関係を持つのか、ロジックがたどりにくいくらいもあるのだが、単純ではあるが意志の力によって創造される偉大なる業（「うまい漬物・東亜共栄圏」と、侏羅紀にこの世に現れて以来連続として生き続けてきた蛙どもの「平凡ではあるが偉大」なイメージとがつながったのではないか。

また、もう一つの黄河源流の探検に賭ける夢の方も、その実

現形態を提言する次元になると、途端に「ヨーロッパ人だけが辺疆を明るみにだしてき、われわれ東亜人がさうでしたか、そんななんですか」といった手はないよ」「日華合作の探検隊。目標は科学的探検だが、東亜文化に及ぼす力は相当大きいに違ひない」というように、国策的なイデオロギーの擁護をはめられてしまう。私などは、そこに劫初の世界に駆け上がるうとする純粋な夢のきしむ音を聞き取りもすれば、さきほども述べたように、十歳の夢と時代が要請してくるものとの間に強引な接ぎ木が行われているといった印象を持つのではあるが、そのような断層に当の本人はどれほど自覚的であったのか。いや、むしろ、東亜共栄圏のヴィジョンを支える観念それ自体も、そのの掲げた「同文同種」「八紘一字」といった標語に端的に示されているように、歴史の必然を無視した、そして最後はその形骸としての惨めな現実と向き合わねばならなかった。夢⁷であったがゆえに、十歳の憧れる時代や社会の障壁が取り除かれてしまっている世界と容易に結びついていったのかもしれない。戦時下における心平詩の一節「夢みるわたくしの。／富士の祭典」を取り上げ、「このリフレインは、たしかにいかにも超歴史的に場違いであり、かつ場違いであることによって時代の戦勝気分が要求するものにあまりにも深くマッチしている」と指摘した

吉田文憲の言葉がここで再び想起される。

烏の大群、遙かの城壁、だいたい色の天が布置された「壮大天然」を前にした感動が、「大天然に匹敵する程の壮大さが他のなにもにも遂行されず人類によつて、現在夜となく昼となく運行されてゐる情景は仏陀も想像しはしなかつたらう」といった、戦争が一つの偉業として迫ってくる感激に容易に変奏していくくたりにも、おなじ情図が見てとれよう。私はなにも、その城壁の内外で多くの無辜の民たちがこの街を占領した日本軍によつて屠られた事実を知る立場から、南京の夕暮れの光景を戦争の遂行とセットにして荘厳していこうとする十歳の心の動きを指弾しようとするのではない。日本軍の南京虐殺事件に取材した堀田善衛の長編小説『時間』が刊行されたのは、敗戦後十年を経た一九五五年のことだが、この作品のモチーフの一つとなるものが、まだそれが小説の態をなしていくことなど予想だにしなかつた段階で蠢動しはじめたのは、彼の言葉を借りれば一九四五年の春、武田泰淳と二人で上海から南京まで旅行し、城壁に上つてそこから見る「壮大な風景」に接した時だ⁸。その折に得た堀田の感動がほぼ原型のまままで投影されている、『時間』の登場人物陳英諦の言葉を次に引こう。

ふとふりかえつて、城外にそびえたつ紫金山を眺めたとき、背筋に冷いものが、さ、と走つた。晩秋の、黄金の夕陽に照らし出された、この樹木のない、険阻な岩山が、真に紫と金の色に映えて王者のように、そして人間の哀愴を疎外した歴史そのもののように、江南曠野の只中に存在しているのだ。

／＼(中略)あの紫金の山は、人間の歴史が終り果てた後でも、この地上に生物がまつたく姿を消した後でも、なだらかな線のどこかに、一抹の険を含んだあの形のままで存在しつづけるにちがいないのだ。(中略)／＼史前であり史後である、この苛酷な美を、われわれは厚い城壁によつて拒否し、城壁によつて、暖い血と柔い肉をもつた人間を守り、精神を守つて生きているのだ。城壁は、敵軍よりも何よりも、先ず第一に、無限の曠野とそこにぐいと盛り上がった岩山の、硬質の美から、人間とその精神を守るためのものなのだ。

眼に映るのは壮大な自然という同じ対象ではあつても、それに対する関わりかたが、英諦と十歳との間では明らかな対照を見せていることがわかる。すなわち、「その城壁の上の灰色の空を、いましも沢山の鳥の群が種撒きみたいに西に向つて流れてゐる。(中略)その台唱までもきこえるやうな気持ちちが北山

はした」というように、大自然の中に自分の生を溶け込ませ、それと親和的な関係を取り結んでいく十歳に対し、英諦の方は人間がそれと合一する理想を掲げることが峻拒してくる苛酷さを、夕映えの中の紫金山に見てとつていたのである。

そうして、そのような発見は英諦をしてこの非情な美に堪えるに足る、激烈な精神のドラマ、認識変革の劇を演じていく人間存在そのものを、新たな眼で見直させていくのだ。「紫金山の美しさ加減、華北の曠野の非人間的なまでの広がり、そういうものは、もしそれを表現したいと思うならば、人間とその歴史の怖ろしさ、徹底的な激烈さ、残虐さ、とにかく人間という人間の、徹底的な何物かを通じてでなければ到底表現出来るものじゃないという觀念を、私はあの城壁の上で得たと思う」という堀田自らの言葉も、この点をまた裏側から証しており、こうしたモチーフの成熟によって『時間』に登場してきた陳英諦は、「彼女のことは、匂いもかたちも手触りもない、硬度の高い觀念の語で語ること」を至上律として、死んで物質と化した妻莫愁のことを手記にとどめていきもする。

が、いまはこの作品の全貌について論じていくつもりはない。こういうことを考えたもう一人の日本文学者が、日本の軍政下に置かれた南京にいたことを知る時、美しく壮大な自然のメ

カニズムを手放して賛美する十歳のとき心性に対して、ある留保条件が必要になってくることを指摘すれば事足る。

なぜか。「実際この壮大な天然は上にもそして向うの向うにも統いてゐる。その向うの向うは地球の向う側にまでも統いてゐる」云々といったフレーズと同質の感動によって支えられた。「向うには重慶もある。モスクウもある。ベルリンもある。ローマ、バリーもある。ロンドンもある。(中略)そしてそれよりも、あのだいたいの向うの天の下あたりには祖国日本の我等の兄弟である兵士たちが銃をみがき、その近くには必ず中国の兵士たちが同じく銃をみがいてゐるのだ」という一節を最後に見てみよう。ここには、いわゆる枢軸国・連合国の価値の序列がない。日本兵も「中国の兵士」も同じように銃をみがいている(ここでの表記が「支那」ではなく「中国」となっている点、別の意味で興味が湧く)。すべてが並置され、自国の側に立つて戦争の正義が主張される気振りが薄い。むしろそれよりは、戦争というきわめて人為的な現象までもが、大天然の運行の一翼を担っているといった印象の方が迫ってくる。そういう人知を超えた秩序の内にあつては、個々の人間が味わう悲憤や憎悪は微塵なものとなり果せ、代わって「もうヴィーナスの左手近くには、支那の月も夢の様な裸体をみせはじめてる」くので

ある。だが、個々の人間の現実態としての生は、壮大な自然を前にして生じた大いなる幻想に対して、さほどかようにその席を譲り渡していけるのだろうか。「何百人という人が死んでゐる——しかし何という無意味な言葉だろう。(中略)死んだのは、そしてこれからまだまだ死ぬのは、何万人ではない、一人一人が死んだのだ。一人一人の死が、何万にのぼつたのだ。何万と一人一人。この二つの数え方のあいだには、戦争と平和ほどの差異が、新聞記事と文学ほどの差がある」という、英諦の言葉がそこに楔を打ち込んでくる……。

〈注〉

- (1) 草野心平『凹凸の道 *対話による自伝』(一九七八)
・五 文化出版局)所収『「歷程」への道 南京招請とわが戦後』聞き手 会田綱雄/山本太郎
(2) 荏町達人「村尾絢子さんの個展に寄す」『大陸新報』一九四一・七・一四)

(3) 戦後、心平は雑誌『赤とんぼ』に童話「さようなら」を寄せている(一九四八・六)。大太郎という少年の南京での敗戦体験を描いたものだが、少年の心を慰めたり勇気づけたりもする友人として、「方々にある」で十歳

が名づけたのと同じ名前の「九郎」という鳥、「阿里」(「方々にみる」の表記は「亜里」という犬が、ここにも登場している)。

(4) 黄浦江に面したバンドに一九二九年に竣工された、高さ七二メートル、四角錐の屋根が特徴的なサッスーン・ハウスの、五階から一〇階までがキャセイ・ホテルにあたる。

(5) 一九三八年十一月に富山房百科文庫として刊行されたスウェン・ヘディン著、岩村忍訳『中央亜細亜探検記』で、ヘディンが蛙を食べる場面の記述は次のようなものだ。

「厚い茂みの蔭になり靴と帽子を重ねて枕とし深い眠りに入つた。醒めた時既に周囲は暗かつたが嵐は未だ樹林の梢を揺つてゐた。時間は午後八時。起き上つて水を飲み焚火をした。飢餓は急に増大し胃に微痛を覚えたので葦の芽と蛙を数匹掴へて飢を凌いだ。」

文章のトーンがあくまで事実の記録性を重視していることがわかる。ということは、十歳が露にする感激には、それだけ彼のロマンチックな感性のバイアスが強くかかっているわけだ。

(6) 「馬ゐない。／草茫茫の競馬場のなか」に夕陽を浴びた一匹の蛙と「自分」とを登場させたこの詩の中にも、

「中央亜細亜の沙漠の中で。スウェンヘディンは飢渴の果てに葦と数匹の蛙を食つた。その物語を読んだとき自分は美しい殺戮・高い需要供給に涙出た」という、「自分」の感激を表出した言葉が見出せる。

(7) 大岡信「宇宙感覚と近代意識」『歷程』、心平、光太郎『蕩児の家系 日本現代詩の歩み』所収 一九六九・四 思潮社)・「草野心平と昭和詩 逝ける『司祭』」『新潮』一九八九・二) 参照。

(8) 大空社『リバイバル(外地)文学選集』第一回配本第十巻『黄河』所載の末永昭二「解説」は、親本は満州の大仙書房としているが、私自身は未見。また、このシリーズで復刻されたテクストの奥付けの方は、「昭和十八年二月十日発行五千部／昭和十八年六月五日再版発行五千部」(発行所 興亜書局)となつているけれども、私の手元にある『黄河』の再版の奥付けは、すでにその前年(昭和十七年＝一九四二年)の九月に興亜書局発行となつていることを報告しておく。

(9) この点については前問孝則『亜細亜新幹線―幻の東京

發北京行き超特急』(一九九四・一二 実業之日本社／一九九八・五 講談社文庫としても刊行)が詳しい。

(10) 「中支二帯は石炭層!」(一九四一・三・五 夕刊)、「埋れたる宝庫／長江二帯深く広い石炭層に／素暗らしい液化の適性」(一九四一・六・二七)といった記事がその例である。

(11) 詩集『日本沙漠』所収作「こびらっふの独白」の内容と表現を念頭に置いた。

(12) 堀田善衛『上海にて』(一九五九・七 筑摩書房)所収「戦争と哲学」。

(13) 注(12)と同じ。

(付記)

本文中に挙げた『大陸紀行』の閲覧に際し、渥友会代表幹事賀米揚子郎氏に便宜をはかっていただいた。ここに記し、謝意を表したい。

(三〇〇〇・一〇・二六)